

第一回総選挙後の政治情勢

——月曜会と大阪苦楽府を中心に——

原 田 敬 一

はじめに

自由民権運動について、大阪の研究が乏しいと言われて久しい。一番強くその声をあげたのは、北崎豊二氏である。二つの方向から進められた氏の自由民権運動研究は、別に総括する場をもちたいが、ここでは大同団結運動以後、第一回総選挙を経た大阪の状況を究明する問題に絞りたい。この点に関して、重要な先行研究は三つある。第一に、猪飼隆明「第一回帝国議会選挙と人民闘争」（『史林』五七卷一号、一九七四年一月）、第二に後藤孝夫「東雲新聞略史」（『復刻東雲新聞』別巻所収、一九七七年三月）、第三に北崎豊二「大同団結運動と大阪の倶楽部——月曜会と大阪苦楽府を中心に」（同氏『近代大阪と部落問題』所収、解放出版社、一九九七年四月。以下北崎Aと略称）である。いずれも『朝日新聞』や『東雲新聞』などを丹念に読み解いた労作であるが、後藤氏のもものは中江兆民と東雲新聞を主題にしたものであり、猪飼氏と北崎氏のもものは第一回総選挙までの追跡が中心であるので、それらをふまえて第一回総選挙後の政治情勢を説明することを、本稿の目的としたい。

一 前提―三つの民権団体について

一八八七年から一八九〇年頃の大阪には、いくつかの政治集団が存在した。⁽¹⁾

第一は、旧立憲政黨員の集団で、数も多く政治的影響力も大きかった。彼らは、明治一四年政変後のある意味での混乱期に、政談演説会などを通じて人々への働きかけを続けていた。その一つが改進黨系も巻き込んだ一八八七年九月の大阪談話会結成である。数カ月で百数十名まで拡大し、同年一二月の第六回大阪府会選挙を闘った後、保安条例におされて一八八八年二月一日に解散してしまふ。その後、彼らは北浜俱樂部を結成し、一方で土着名望資産家の地域組織として南俱樂部（一八八八年二月一九日設立）、西俱樂部（同年四月八日設立）を組織した。⁽²⁾

第二は、旧自由黨員の集団で、活発ではあるが、地域への影響力は相対的に少なかった。彼らは、一八八二年九月以来「自由平権懇親会」を四回開催し、一八八七年一月関西愛国同盟会の組織化に至る。⁽³⁾ 同盟会は、少数の土着名望家も含むが、主導的な人物は「寄留民」であり、民黨運動を外から持ち込むものだった。

第三は、壮士団である。一八八七年一二月の保安条例の公布により、東京に集まっていた壮士団が、大阪へ流入し、新たにいくつかの結成も見られた。それらに先だって、一八八七年八月には、大日本振義会が、芝亭実忠・宮内和泉・山野千里・大河内清次郎・河野嘉太郎・物集角太郎らを発起人とし、西区新町南通三丁目に設立された（『大日本振義会』、『大阪日報』一八八七年八月一〇日）。一八八八年には、宮地茂平・津野毅一郎・安田好則らの壮士俱樂部、河谷正鑑らの浪華俱樂部（九月）も結成された。一八八九年一月には、中江兆民も関与した大阪青年俱樂部も結成されたという。これらは、「政談演説会や壮士運動会に終始しており、民衆の切実な生活要求や運動との結びつきは殆んどみられない」⁽⁴⁾ものだった。宮地茂平や津田官次郎らは、一九九二年九月には東京に舞台を求め、壮士による東洋義会を組織している。⁽⁵⁾

これら三つの民権団体は、北浜倶楽部∨関西愛国同盟会∨壮士団の順で、地域への影響力が少なくなっている。いずれにしても、彼らも第一回総選挙を闘うわけである。

二 第一回総選挙を前にして——月曜会と大阪苦楽府

第一回総選挙にどのような政治勢力でのぞむかは、地域の政治団体に結集と分裂の契機を与えるものとなっていた。大阪でも同じである。

一八八八年の大阪で、「最大・最有力の倶楽部は北浜倶楽部であつた」⁽⁶⁾。後藤象二郎と星亨のすすめる大同団結運動は、一八八八年一〇月一四日大阪で、全国有志懇親会を開き、特に九州の勢力と大阪の勢力との協力が約された。これをもとに、北浜倶楽部では、一九日大同団結して一大政党を作るかどうかを議論する会議をもった。ここで、大三輪長兵衛ら改進黨員は、大同団結運動の政党化に反対した。彼らを中心に同月下旬大阪協和会が結成される。⁽⁷⁾北浜倶楽部は、事実上分裂した。

一〇月一九日の会議で、九州の勢力との連合を求めた残りの北浜倶楽部のメンバーも、翌一八八九年二月下旬の九州同志委員会が九州だけの団結を決議したため、連合をあきらめざるを得ず、河野広中らの大同倶楽部に結集することを、三月末から四月には決めたようである。四月七日には、次の代表者による会談が行われているのである（『大阪朝日新聞』四月一〇日）。

大阪側 菊池侃二・森作太郎・渋川忠二郎・伊藤徳三

大同倶楽部側 垣内正輔・松下丈吉

残りの北浜倶楽部のうち、菊池ら大同倶楽部に結集することになったメンバーが、この会談の直後の四月一二日月曜会を結成するのである。月曜会は、大同倶楽部系の有力団体となった。

○当地の独立党 と称せらるゝ一派の団体は遂に大同派に聯合することゝなりし趣を此程の紙上に掲げしが、此事に付同党の重立ちし人々は一昨夜（引用者注：一二日）北浜倶楽部に集会を開き、愈々此度委員を差出し大同派委員と協議の上果して意見の合同し将来共に運動すべきものと認むる時は之に聯合すべしとの事を議決し、猶右委員は山下重威・森作太郎・東尾平太郎の三氏と、之に伊藤徳三・横田虎彦二氏のうち協議の上一名を加へ都合四名と定め、又此独立党と称せらるゝものは自今月曜会と称して毎月曜日に集会を開き、政治経済等の研窮を為すことをも同時に議決したりといふ（『大阪朝日新聞』四月一四日）

このうち森作太郎（代言人、西区）は、一八八七年十二月（第六回大阪府会選挙）で当選以来、一八九四年一月辞任まで府会議員を続けている。山下重威（代言人、東区）は、一八八八年二月（補欠選挙）で当選し、一八八九年二月満期退任まで府会議員を務めた。東尾平太郎（南河内郡、農業）は、一八八一年三月（第一回府会選挙）で当選以来、一八八七年一二月まで府会議員を務め、さらに一八八九年二月の選挙でも当選したが、一八九〇年七月の第一回総選挙で衆議院議員になり、府会議員を辞職する。つまり三人とも現職の府会議員だった。⁽⁸⁾

四月七日の会議に出席した四人のうち、菊池侃二（東区、代言人）は一八八七年一二月から、衆議院議員になった一八九〇年七月まで府会議員。渋川忠二郎（西区、代言人）は、一八八九年一月から一八九三年二月まで府会議員。⁽⁹⁾二人に森作太郎を加えた三人が、現職の府会議員となる。

これから月曜会の中心メンバーは、名望家からなる府会議員クラスだったといえよう。後藤孝夫氏は、「北浜倶楽部、特にそのなかの進歩分子を集めた独立党」で「府会の有力者をふくむ代言人が多かった」と評価している。⁽¹⁰⁾『東雲新聞』に掲載された構成員は次の三〇名（四月二八日と三〇日の記事、並びに三〇日の訂正記事を含め、五十音順に並べ換えた。表中（代）は代言人、（新）は新聞記者、（医）は医師の略。後掲の「姓名表」に基づく）。

秋月清十郎・石橋栄太郎（代）・泉由次郎・伊藤徳三（代）・植田重太郎・梅田壮二（代）・奥繁三郎（代）・金

丸鉄・菊池侃二（代）・岸本庄平（代）・窪田熊太郎（代）・後藤玉城・渋川忠二郎（代）・左近司六蔵（代）・佐々木政父・太宰勇助（代）・多田直勝（新）・豊田文三郎・中川澄（新）・成道二郎（代）・西村輔三（医）・羽床修（代）・東尾平太郎・松本幹一・溝端佐太郎・森作太郎（代）・薮清右衛門・山下重威（代）・横田虎彦（代）・善積順蔵

この報道は、北崎氏が発見された「月曜会規則・月曜会々友姓名表」^⑪に掲載された七六名（明治廿二年六月調査）と対照すると、傍線を付した二七名と殆どが重なっている。『東雲新聞』の調査力の高さを示している一例である。「太宰勇助」は、「姓名表」の友輔が正しいものと思われる。北崎A論文には、同じ「明治廿二年六月調査」のものに人名の追加が書き込まれている「姓名表」もあり、それには松本幹一も登場する。『東雲新聞』の三名のうち一五名が代言人であり、その意味では「代言人党と称するも不可なきなり」と『東雲新聞』（一八八九年五月三日）が喝破するのも不当ではない。ただ、一カ月余り後に作られたとする「姓名表」には、それ以外の四六人が掲載されている。『東雲新聞』の調査力を高いものと認定する立場から言えば、四月の三〇人が、六月には七六人に増加したのと言えよう。また、七六人段階では、一七人が代言人で、四一人が大阪府会議員となり（区部選出一一人、郡部選出三〇人）、定数七一人（区部二八人、郡部四三人）のうち「過半数が月曜会に加盟した」^⑫。月曜会の主力は、府会議員に選出されていた地域名望資産家に移行していたのである。

一方、月曜会とは異なる政治団体も結成された。北崎A論文によれば、「独立党が月曜会と改称することを議決して間もなく、それに対抗する形で大阪苦楽府が設立されることになった」^⑬。彼らは、北浜倶楽部が加わらなかったで、独自に「大阪に一大団結」（『東雲新聞』四月一六日）を作ることにしたという。四月一四日に開かれた準備会には、二〇〇余名が集まり、創立委員一五人を選んだ（同）。彼らは、当初「大阪倶楽部」、のちに大阪苦楽府を名称とする^⑭。大阪苦楽府が正式に結成されたのは、一八八九年四月二六日。この日選出した常議員は、次の一五

人だった（『東雲新聞』四月二八日、五十音順に並べ換えた）。

浅野雄介・安東久次郎・飯村儀助・川田勘兵衛・岸伸吉・栗原亮一・後藤昌直・小西米次郎・寺田寛・

戸田猛馬・豊村喜久蔵・深見伊助・細井作兵衛・矢野勝・山脇鋭郎

このうち関西愛国同盟会の活動で名前が出ていたのは、

深見伊助（介）・戸田猛馬

の二人である。深見は、第六回自由平権懇親会の「肝煎」であり、自由党员である（同）。栗原亮一・寺田寛・戸田猛馬の三名は、東雲新聞の構成員である（前掲後藤論文七三頁）。このうちから、

小西米次郎・戸田猛馬・山脇鋭郎

の三名が幹事に互選された（『東雲新聞』四月三〇日）。大日本振義会などの壮士団体の関係者が見当たらないといえ、自由平権懇親会―関西愛国同盟会の系譜をもつ自由党系の団体と考えられる。

月曜会や大阪苦楽府が対立関係をもつて結成されたのは、第一回総選挙を前にした政治勢力の再編過程にあったからである。全国情勢も眺めてみよう。¹⁶¹⁷

一八八九年四月末に開かれた大同団結派の主義綱領起草委員会は、河野広中らの政社結成を求める派（いわゆる政社派）と、大井憲太郎らのゆるやかな連合を求める派（いわゆる非政社派）に分裂し、五月一〇日政社派は大同倶楽部、非政社派は大同協和会を結成した。両者は対立関係にあったが、おりから進められていた大隈重信の条約改正案には反対で、両派は保守中正派・玄洋社・紫溟会などとともに、八月末に条約改正案反対の大演説会を東京で開いている。

一二月一九日、板垣退助が動きだし、大阪で旧自由党员との懇親会を開いた際、愛国公党を組織することを明らかにした。大同倶楽部も大同協和会も、これには不参加で、独自に政党結成計画を進めていく。一八九〇年一月二

一日、大同協和会は解散し、自由党を結党した。五月五日、愛国公党が結党されたが、板垣退助は愛国公党・自由党・大同倶楽部の三派合同を求めた。一四日、三派の代表者会議は、三派合同を決議し、一五日庚寅倶楽部を組織したが、正式な政党組織は総選挙後に延期された。第一回総選挙は、各派の力を試す場として闘われた。

三 第一回総選挙と大阪

一八九〇年七月一日に举行された第一回衆議院議員総選挙（定数三〇〇）は、第1表のような結果になった。同年八月二日、国権派や保守中正派などの議員六三名によって大成会が結成された。⁽¹⁸⁾

八月には、旧自由党系で統一政党へ向けた運動が活発化した。四日愛国公党と自由党がまず解散、七日九州同志会（九州連合同志会は、同年七月二二日九州同志会と改称した）前掲『議會制度百年史』二頁）、一七日大同倶楽部と続いて解散した。二三日からこれら各派（旧自由党系三派と、旧九州同志会）に京都公友会、群馬公議會も加わった委員四〇名が集まって、合同問題を議論し、二五日に新政党の結成を決議するに至った。⁽¹⁹⁾ここに、議員一二二名が参加する立憲自由党が成立することになった。それには前記会派から次のように加わっている。⁽²⁰⁾

第1表 第一回衆議院議員総選挙の結果

大同倶楽部	54	愛国公党	36	九州連合同志会	24	自由党	17
立憲改進黨	43						
自治派	12	国権派	12	保守中正派	6		
京都府公民会	5	広島政友会	4	宮城政会	4	群馬公議會	3
						京都公友会	1
						無所属	79

（注）『議會制度百年史』院内会派編衆議院の部、一頁、大蔵省印刷局、一九九〇年

大同倶楽部	42	愛国公党	34	自由党	13	九州同志会	21
／群馬公議會	3	京都公友会	1	立憲改進黨	1	広島政友会	1
／無所属	6						

八月二十八日、立憲自由党所属議員と六名の無所属議員で弥生倶楽部が、院内交渉団体として組織された。以上の所属を、大阪選出議員で表示すれば、次のとおりとなる。

第2表 第一回総選挙選出大阪各選挙区議員の所属異動

選挙区	議員名	当選時	当初	八月段階
第一区	粟谷品三	中立	無所属	大成会
第二区	豊田文三郎	月曜会（大同倶楽部系）	無所属	弥生倶楽部
第三区	浮田桂造	中立	無所属	大成会☆
第四区	中江篤介	大阪苦楽府（自由派）	無所属	弥生倶楽部
第五区	菊池侃二	月曜会（大同倶楽部系）	大同倶楽部	立憲自由党↓弥生倶楽部
第六区	俣野景孝	中立	無所属	大成会
第七区	東尾平太郎	月曜会（大同倶楽部系）	大同倶楽部	立憲自由党↓弥生倶楽部
第八区	横山勝三郎	月曜会（大同倶楽部系）	大同倶楽部	立憲自由党↓弥生倶楽部
第九区	佐々木政文	月曜会（大同倶楽部系）	不明	大成会☆

（注）当選時までのデータは、北崎A論文二七九頁の第2表。当初とは、当選から八月の各会派結成までを示す。八月段階の移動は、前掲『百年史』二〇五頁による。☆は、大成会入会日付が不明で、「その後加入した」と記されていたもの。

ここに大阪選出代議士グループのうち、立憲自由党が三名、立憲自由党と共同の院内団体弥生倶楽部に加わったのが、それ以外に二名、合計五人が立憲自由党系となった。同年十一月二十九日、第一議会の際の議員数は、弥生倶楽部一三一人となっており（三〇〇人中四三・六％）、九選挙区の過半数を立憲自由党系で占めたのは、平均以上

の出来であり、そこには地域名望資産家を組織し得た月曜会の力が反映していたと考えられる。ただ、大阪には立憲改進黨系の有力な基盤がなく、政府よりの大成会と、民黨の立憲自由黨が直接対立の構図となっているのは、次の総選挙での運動状況を示唆していたとも言えよう。

立憲自由黨の正式な結党式は、九月一日東京で行われた。總裁などはおかず、各府県二名以下の常議員により選出した五名の幹事による集團指導体制で運営されることになった。⁽²⁾大阪府から選出された常議員は、中川澄と横田虎彦だった（『郵便報知新聞』一八九〇年九月一六日）。中川は、『大阪日報』のもと印刷署名人で旧立憲政黨員、横田は月曜会員である。

四 倶楽部の動向——月曜会の解散

ともあれ、立憲自由黨系の代議士五人を抱えて、有力な地盤を示しているように見えた大阪に、急ぎ支部を作ることが、立憲自由黨の中央、大阪地方の両者の課題となつて現れてきた。ただ、ここで問題になつてきたのが、第一回総選挙の直後、七月二五日に公布された集会及び政社法である。政黨活動と、政黨間の連携を制限するこの法に、『大阪朝日新聞』などは大きな反対の声をあげなかったものの、実際の圧迫は公布以前から始まっていた。

○大阪月曜会 の組織に就き大阪府警察本部に於て何か取調を要することあり、一昨日同会幹事を喚出せしかば伊藤徳三氏が出頭したるに、稲田高等警察課長が之に面接し長々問答ありし趣なるが、是は万一同会の当初学術上のものなりしに近来其運動漸く政治線内に及びしが如き形迹あるゆえ其辺の事に関するものにてはなきかなど評する人もありといへど實際如何にや（『大阪朝日新聞』七月九日）

この観測は当たっていた。この時、稲田課長は「同会にして万一政治上に運動せば遂に解散を命ずるの已むを得ざるに至らん」と伝えていたと思われる。そのことを含んで、次のような記事が、二週間後の『大阪朝日新聞』に

掲載された（七月二六日）。

○大阪月曜会の政社組織 大阪月曜会は予て披露せし如く一昨々二十三日関西日報社内にて總會を開き、三百二十余名の会員中僅に三十余名出席せしが、其議案の要領は、元來同会は學術的組織なれども時世の変遷に伴ひ其運動の勢不知不識夫の政治の上に趨かんとするを以て、大阪府警察本部は度々注意を促し、同会にして万一政治上に運動せば遂に解散を命ずるの已むを得ざるにも至らんとの事を達し其上又内務省より同趣意の達を蒙れり、故に同会は今後も猶學術的組織を存するか將断然政社組織となすかを此際に決せざるべからずといふにありしに、結局政社組織となす事に議決し、引続き其組織に係る取調委員を置くべき事をも議決し、即ち幹事中の横田虎彦、伊藤徳三、豊岡進一郎の三氏等七名、会員中の山下重威、左近司六蔵、菊池侃二、奥繁三郎の四氏を挙げて其委員と定め頓て退散を告げたりと聞く

確かに、「一八八九年六月四日制定」の「月曜会規則」⁽²²⁾は、

第三条 本会ハ同志相会シ政治法律經濟等ノ學術ヲ研究スルヲ以テ目的トス

とあつて、政社ではなく、學術団体の様相をとつていた。七月二三日の總會では、明確な政社組織とすることを議決し、七人の調査委員を選出している。また、この記事では一八八九年六月の七六人が、「三百二十余名」にまで拡大しているとされる。⁽²³⁾

政社組織化との議決にも関わらず、会員中には異論も存在し、「其は調査委員に於ける調査の都合もあるべけれど兎に角公然の結社届出は来月庚寅俱樂部の三党合同一件大会の議決を見るまで待たんとの内議もありとかいふ」（『大阪朝日新聞』七月二七日）と、全国情勢によつて決めるという意見も根強かつた。恐らく、それらの人々の名前を消した三〇数人の名簿を作り、同月二九日所轄警察署（事務所は関西日報社内にあつたから、その所在地西成郡の曾根崎警察署だと思われる）に政社届を提出した。

○大阪月曜会（前略）其後また驟に内議の変じたるものか、一昨日仮幹事伊藤徳三、左近司六蔵、豊岡進一郎の三氏より会員名簿を添へ所轄警察署へ弥よ政社の届出を為したり、此の名簿に依れば総員すくつて三拾余名にして創立以来同会員中錚々の聞ありし菊池侃二、豊田文三郎、東尾平太郎、横田虎彦等重立てる諸氏の名前は之なく多くは島下、豊島、能勢郡の有志者并に当地の代言人なりしと、學術的の結社と政社の組織とは大に其趣を異にする所ありとは云へ去るにても三百余名の会員が一時に三十余名に減じたるは何か子細のある事ならん（『大阪朝日新聞』七月三十一日）

いったんは会員名簿を提出して政社として再出発した月曜会だったが、八月には解散を決める。

○月曜会解散の議 当地の月曜会は過日政社法発布の当時逸早く政社組織に改め勇らしく北警察署へ届出を為したるが、其墨痕未だ乾かざるうち本家本元なる大同倶楽部にては総会の議決を経て解散する事となり、更に進歩党に合して一大政党の組織に従事しつゝあるに依り、此際月曜会のみ政社組織として孤立する時は現行の政社法に依り他の進歩党に合同する事能はざるを以て寧ろ解散して世上の動静を窺ふに如ずとの説、同会の重立ちし人々の間に起り畧ぼ解散の事に評議一決し居る由なれば不日總會を開き本議に付したる上いよく解散届を差出すならんと云ふ（『大阪朝日新聞』八月二十四日）

この頃、解散に追い込まれた名望家団体は、他にもあった。西倶楽部は、総選挙の直後の七月九日解散を決めている（『大阪朝日新聞』七月二一日）。東区の進取会も七月一二日解散した（『大阪朝日新聞』七月二一日）。いずれも総選挙で力を発揮することができなかったという理由だった（同）。交信倶楽部が、集会及び政社法によつて解散を決めたのは、八月一八日（『大阪朝日新聞』八月二〇日）。北倶楽部も、一八八九年の市会選挙と一八九〇年の総選挙が終わると、退会者が続出し、創設の際「二百四五十名」もいた会員が、「昨今は僅に七十余名」となったため、一〇月八日の常議員会で解散を決めた（『大阪朝日新聞』一〇月一〇日）。

月曜会の場合は、政社組織化に同意する会員が少なかったためもあったかも知れないが、八月二四日の記事にあるように、進行しつつある新政党結成に加わろうという政治的積極性のもとに解散を決めたものだろう。解散を決議した総会は、九月七日に行われた。

○月曜会の解散 当地の月曜会は予記の如く一昨七日午後一時を期し北新地裏町の静観楼に於て会員の総会を開き同会の存廃を議したるに来会者五十名許りあり、満場一致の賛成を以て同会を解散し、各自随意に立憲自由党に加入することに決し、其残務は従来の仮幹事伊藤徳三、豊岡進一郎、左近司六蔵三氏及会計委員たりし後藤玉城、羽床脩の二氏に委任し、多分今九日を以て曾根崎警察署に之を届出ることになしたり（『大阪朝日新聞』九月九日）

この記事は、懇親会の席上「社交上の親睦を図らん為一の倶楽部を設置すること」を決めて、午後七時頃解散したと続く。

月曜会と対立してきた大阪苦楽府でも、八月には解散意見が現れ出した。

○大阪苦楽府 同苦楽府は元来社交的の団体にして、政治上には余り関係なきものゝ由なれ共、会員中には往々政治界に奔走せる人ある故にや、先般政社法発布の当時府下の或る新聞紙には其筋より嚴重なる達を受けたりなど記載したるが、今親しく同会員の説く所に拠れば、未だ嘗て何等の沙汰を受けたことあらず、然れども会員中には二三解散の意見を持せるものありて其論拠とする所は、大阪苦楽府員は多く摂河泉同盟会に加入せしに付敢て二個の団体を設くる必要なしと云ふに在れど、這は誠に僅僅の少数なれば矢張り従来 of 如く存置する事に決し、目下役員改選等執行する運びなり云々とありき（『大阪朝日新聞』八月二六日）

文中の「摂河泉同盟会」とは、一八九〇年四月一九日の「摂河泉三国懇親会」（八〇余名参加）の席上、大阪苦楽府の矢野勝の「摂津、和泉、河内三国の将来自由主義を執らんもの相合して一の団体を組成し摂河泉同志会と称

し政治上に運動せん」という提案で組織されたものである。その場で創立委員に、大阪苦楽府の寺田寛、寺尾鉄之助、日野国明が選ばれ、「府下の大阪苦楽府、交信倶楽部、茶談会、南摂同志会、北摂同志会の各団体并に摂津の豊島郡、島下郡、和泉の日根郡、河内の交野郡の有志中より一人乃至二人の発起人を出し、創立事務所を大阪苦楽府内に置く」と議決している（『大阪朝日新聞』一八九〇年四月二二日）。この記事が示すように、この団体は二五日に予定されていた「愛国公党の結党式」に参加するための準備だった。とはいえ、大阪苦楽府系の団体においても、府下四郡以上に地域団体を組織しているのが、注目される。

八月の記事の末尾にあるように、存置説が多数を占め、役員選挙が行われ、常議員一五人を選出、常議員会は、次の三人を幹事に選び、彼らは「諾したり」という。

「大阪苦楽府の新幹事」矢野勝・寺尾鉄之助・金丸鉄

ただ、方針に変更があり、「尤も同苦楽府の方針は専ら府下実業者流を集め、政事以外に着実の運動をなす方に取る筈なるよし」（『大阪朝日新聞』八月三〇日）。第一回総選挙であまり影響力を発揮できなかった理由を、実業者ら名望家の結集の少なさにあったと総括したかと推測される。

大阪苦楽府は存続したが、月曜会が解散したため、両者の対立は半ば解消し、立憲自由党の大阪事務所は、半年交代で東雲新聞社と関西日报社に置かれることになった（『東雲新聞』十一月一六日）。

一八九一年一月一八日に開かれる立憲自由党の臨時大会を前に、ようやく旧月曜会員、大阪苦楽府会員などを集めた在阪の自由党員の集会在、一月一三日開催された。

○自由党員の懇親会 昨日午後三時より曾根崎新地裏町静観楼に開きし掲題の会は、参集七十人許にて、先づ森作太郎氏開会趣意を述べ、次に矢野勝氏は来る十八日の東京大会に望む所を、西原清東氏は東京地方に於ける目下の景況を、日野国明氏は十八日の大会に出席する大阪府の委員に注意を促す旨を孰も述べ、其他竹中鶴

次郎氏等も酒間に談話をなし、結局別室にて上京委員の数を取定めし結果、即ち島上島下二郡にて二人、能勢豊島二郡にて一人、日根南二郡にて一人、西成郡にて一人、大阪市は常議員中の五人を孰も選出する事となりし趣披露ありて之に決し、午後六時無事に散会せりといふ（『大阪朝日新聞』一八九一年一月一四日欄外記事）

この記事は、欄外記事であるため、正確さの点でやや欠けている。大阪支部が未成立のため「常議員」は存在しないはずである。翌日の記事を見てみたい。

○立憲自由党の懇親会 一昨日午後三時より曾根崎新地裏町静観楼に掲題の会を開きしが、参集者は六七十人許にて、先づ森作太郎氏は、発起人に代り開会趣意の当地黨員新年宴会と同党緊急問題に対する打合とを兼るものなる事並に関西黨員の結合力を此際一層堅固にしたき旨を述べ、其他矢野勝氏、西原清東氏（神戸黨員）、日野国明氏、竹中鶴次郎氏等の談話あり、夫より大阪地方代議員別室に移り、同議員の来る十八日東京大会に参列すべき人員を定めて更に宴席に來り、此結果の島上島下二郡にて二人、能勢豊島二郡にて一人、日根南二郡にて一人、西成郡にて一人、大阪市は五人の参列者を出す事及び其人は明十六日集会予め大会に係る打合をなす事となりし趣披露し之に決して散会せしは午後六時なりき（『大阪朝日新聞』一月一五日）

この記事では、大阪市選出の代議員も、たんに「五人」と書かれているのみである。また、森の開会挨拶では、「関西黨員の結合力」を強めたいとある。大阪における自由黨員の團結は生長途上にあつたのである。発言者には、旧月曜会（森）も大阪苦楽府（矢野）もあり、両者が加わつた立憲自由党の組織化であつたことが明らかである。

その後も、大阪府下の立憲自由黨員の集会が行われていることは、次のような記事から判明する。

○立憲自由党代議員会 当地の立憲自由黨員は今日午後六時より北陽静観楼に於て代議員会を開き、東上委員の東京大会の景況を府下一般の黨員に報告する件其他運動上の方法を協議する筈なり（『大阪朝日新聞』一月

二七日)

○自由黨員の会合 大阪市及び郡部に在る立憲自由黨員中の重なる人々は、昨日午後一時より東区北久宝寺町第一樓に集會し、前日同黨の大会に付東上せし委員よりの報告會を開く日限及其他近時の政況を報告する等に係る協議をなす筈なりき(『大阪朝日新聞』二月一日)

○立憲自由黨大阪地方部大会 (前略) 一昨々日同樓に開きし大阪地方部員相談會は二十七人の出席にて、竹中鶴次郎氏が東京大会の結果を物語りし後、將來の運動に關して相談を始むるに、我黨議は二三有力の人に左右せられ、地方部員の意見曾て行はれず、且其二三有力の人の運動には壯士を利用するが如き言語道斷の形跡も見ゆ、大阪地方部員は速かに是等の人々と手を別ち政黨の名実相稱ふ自由黨を樹立せんといふやうなる意味にて発言せしありしといへば即ち之と相關するものかとも推量せらる(『大阪朝日新聞』二月三日)

一月の記事が「代議員會」と記し、二月三日のそれが「大阪地方部員相談會」と書くように、大阪での組織はまだおぼろげなものだった。

月曜會が組織された後も、北浜俱樂部は社交的組織として存続し、月曜會メンバーの森作太郎も幹事となっていた。それも終焉に近づいていた。

○北浜苦業部 は兼てより夫の社交俱樂部の成立する上は之に引繼ぐべき決議をなしたれども今日の模様にては俄に其成立を見るべき見込もなく且北浜苦業部は近來追々減員し収支相償はざるに付き去る十六日集會の上にて仮に廃することに決せしも当日出席人員僅々たりしを以て猶明日總會を開き臨會者の多数に拘はらず存廢を決議する筈なりといふ(『大阪朝日新聞』三月一九日)

三月一六日の總會で解散を仮決議したものの、少数だったため再度二〇日に總會を開くという記事である。

○北浜苦業部解散に決す 北浜苦業部臨時總會は予報の如く一昨夜六時より開會せしが出席員十名にて當会の

問題たる同苦楽部存廃の事は愈解散することに決定し現任幹事上野理一、森作太郎両氏の外尚残務委員三名の選挙をすることとなりて投票を行ひしに、前川模造、秋月清十郎、田口謙吉の三氏当選承諾し、右幹事、残務委員は本月中に財産の処分をなしたる筈なりしと（『大阪朝日新聞』三月二二日）
 ようやく北浜倶楽部は、三月二〇日に解散を決議した。

五 立憲自由党からの分立——大阪自由倶楽部の結成

二月初旬第一議會のさなか、取るべき方針について、大阪でも議論された。次は会合についての報道。

○立憲自由党大阪代議員会 は愈一昨十一日正午十二時より東区久宝寺町第一楼に開きたり、此日参集の代議員は伊藤徳三、横田虎彦、寺田寛、金丸鉄、木幡正起、竹中鶴二郎、善積順藏、日野国明、寺尾鉄之助、成道二郎、森清五郎、三谷軌秀、門野又藏、森秀次、植場平、野田正景の諸氏等三十一人にて、黨員にあらざる者は総べて会場に入るを許さず、極めて秘密に事を議し……（『大阪朝日新聞』二月一三日）

嚴重に閉ざされた會議だったが、『大阪朝日新聞』はその内容を伝えている。

まず、大阪地方の運動を分離すべきだという發議があつた（發言はいずれも同記事による）。これの先驅は二月一日の相談会に既にあつたことを想起してほしい。

東京なる立憲自由黨員が近來の挙動は、夫の議院にて専制をなすの傾あるが如き、壮士を利用して事をなさんとし、却つて壮士に利用せらるゝやうの姿あるが如き、太だ穩かならざるあり、更に其裏面を觀るときは又言ふべからざる事も見え居れり、此他専横に涉る事往々にして之あり、我輩は斯る人々と運動を共にするを欲せず、且將來の進歩に於ても如何あらんかと懸念せらるゝを以て寧此際大阪地方部員だけは分離する方関西の政治的運動却つて引立津べし、然はいへ分離の後も自由主義は固く執り其運動の上に於ては立憲自由党と相提携

するが宜しからん

この分離説に対して、反対論が展開された。

東京黨員行為に弊害ありとするも、其は矯正し得ざるにあらず、板垣伯も之には大に配慮し種々黨員と相謀りつゝあり、矯弊の実が挙るも遠からざる事ならん、兎に角来る四月の東京大会まで本案の議決を延期すべし前者の壮士嫌いから見て、発議者は旧月曜会、板垣退助の動向に詳しいところから反対者は大阪苦楽府系か壮士系と推定される。

この会議で、分離説は三人中の一八人が賛成し、可決した。ただし、三月八日の「大阪地方部員臨時大会」を開き、そこでも可決されれば、四月の東京大会に提案することとなった。三月の地方部会準備委員として選出された

横田虎彦、寺田寛、森秀次、野田正景、植場平

の五人は、旧月曜会（横田、森）、大阪苦楽府（寺田）、中間派（野田、植場）となり、旧月曜会系が優勢だった。大阪地方部黨員の分離説が出ている中、二月二十八日大阪苦楽府も解散を決議する。

○大阪苦楽府の解散 同苦楽府は欄内にも報道せし如く昨二十八日臨時総会を開きしが、其題案たる同苦楽府存廃の件は断然解散すべしといふに決し、且残務を現任幹事寺尾鉄之助、矢野勝、金丸鉄の諸氏にて処弁する事をも取定めたりと聞く（『大阪朝日新聞』三月一日欄外記事）

この解散は、板垣退助の動向に沿ったものだというのが、『大阪朝日新聞』の観測だった。

○大阪苦楽府総会 大井憲太郎氏等の自由党再興の挙に与り、夫より会員を以て関西自由党を組織し、後又愛国公党の樹立に及びて更に之に入り、今は立憲自由党中のものたれども、常に板垣伯の挙措を仰視しつゝあるが如き同苦楽府は……（『大阪朝日新聞』三月一日、前記欄外記事の「欄内」にあたる）

板垣退助の動向を確認するには、第一議會での予算審議をおさらいしなければならない。²⁴ 山県有朋内閣は、一八九〇年一月三日「明治二十四年度歳入歳出総予算案」を衆議院に提出した。五日には予算委員会が成立し、予算案の査定にあたつた。二七日にようやく査定を終わり、翌一八九一年一月八日、大江卓委員長が衆議院本會議に、審査経過とともに報告した。松方正義蔵相は、いち早く九日には査定不同意を予告発言している。政府と民党の予算案をめぐる対立が表面に現れると、特に立憲自由党の硬派グループが、妥協的な代議士を追及しはじめる。硬派グループの中心は、大井憲太郎らで、壮士集団を使って、妥協の封殺にやつきとなつた。大阪地方黨員集会で、二月初め以来議論になつている壮士問題とは、このようなもので、「二三の有力者」に大井憲太郎が含まれるのは間違いないだろう。板垣退助は、最初の議會における予算案の成立を願つていたようで、一月一日には、立憲自由党に対して「今日より兄弟と分立して政治社会に立つの決心」（『大阪朝日新聞』一八九一年一月二日）との書簡を送り、直ちに「板垣伯は栗原亮一、江口三省両氏と共に今十九日立憲自由党を退きたり」（同）と報じられた。直接には、栗原が執筆した『自由新聞』の社説が、壮士集団を非難するものであつたことから、一日の立憲自由党協議会が、詰問団を自由新聞社に送ろうとした。それを板垣が「自由主義に背くものだ」と断じて、決別書を送つたものだった。この時は、和解が成立したが、結局二月二〇日土佐派（旧愛国公党派）が予算処理をめぐる決議（憲法第六七条問題）に、賛成派に回り、硬派の主張する予算削減案が通過できず、妥協することになると、二四日土佐派を中心に脱党する。続いて、二六日板垣も脱党した。

先の『大阪朝日新聞』の観測はあたつていようか。一月の板垣脱党騒ぎの際、同時に江口三省の名が挙がつている。江口は、『東雲新聞』の記者であり、大井憲太郎らのグループが壮士集団を使って代議士を脅すことに対し、『東雲新聞』でも反発があつたことを示しているのではないか。壮士集団を含んでいた関西愛国同盟会とは異なつた集団に、大阪苦楽府は変化していたのではないか。そこで、大阪苦楽府を解散し、旧月曜会との実質的合同

を意味する、大阪での統一的政治集団作りに踏み切ったと考えられる。

二月に予告された三月の立憲自由党大阪地方部大会は、三月七日に開催される。その議題について、『大阪朝日新聞』は次のように、寺尾と横田の共同案だと伝えている。

○自由党大阪地方部大会の題案（前略）同会の題案は過日代議員会にて此準備委員に撰挙せられたる寺尾鉄之助、横田虎彦等諸氏の起草に係り「大阪地方黨員は此際断然分離する事、大阪自由苦楽部を設立する事、苦楽部は政社組織にする事、常議員三十名を置く事、理事三名を置き諸務を処弁せしむる事、苦楽部に充つるため家を借入るゝ事」の諸件なりとぞ、又此日大会に参集する大阪地方部員の種別は摂河泉同盟会員、旧月曜会員等なる由（『大阪朝日新聞』三月一日）

この号の別の面には、脱党した片岡健吉・植木枝盛らが「自由倶楽部設立の相談」のため二五日に東京木挽町に集まったという記事が掲載されており、『大阪朝日新聞』は「（大阪自由）苦楽部を以て更に東京の倶楽部と東西相呼応する事になりゆくべきか」と観測した（三月一日）。

さて七日の大会である。

○立憲自由党大阪地方部大会は愈よ昨日午後三時より中の島の洗心館に開き、参列者六十三人にて、寺田寛氏を座長とし、同会準備委員提出議案中、同党と分離する件（第一）を先づ議したるが、三人を除く外は皆之を可とし断然分離することに決し、次に政社組織の大阪自由倶楽部を設くる件（第二）も多数にて可決し、次に同倶楽部規約十三条（第三）を議し少修正を施せしまでにて亦可決し、次に規約に定められたる常議員三十人を置き、其中にて理事三人を互選する事とし、猶議員推挙は簡便法に従ひ議長に於て□員五人を定めて之をなさしめ、五人の委員も常議員中のものとするに決し、推挙委員は横田虎彦、森秀次（皆旧大阪月曜会員）、寺尾鉄之助、戸口亀太郎、林賢造（旧大阪苦楽府派）五氏が指名せられ、五委員合議の上全く推挙し、夫より

懇親会を開き、六時頃退散となれり（倶楽部規約全文及び常議員姓名とも已に得たれども欄外も余地なきに由り次号に記載せん）（『大阪朝日新聞』三月八日欄外記事）

分離説は六〇対三という圧倒的多数で可決され、組織名称、規約、役員と滑らかに決められていった。旧月曜会と旧大阪苦楽府との間にはなんの溝もなくなっていた。「百二十余人」とされる党員は、連署した分離届を準備し始めた。

○大阪地方部の分離届 大阪地方立憲自由党員の分離に確定せしこと前項の如くなるに就き、其党員百二十余人は東京の同党事務所に届くべき書面の連署に着手したり、此調印は両三日中に取纏め其上直ちに郵送する都合なりといふ（『大阪朝日新聞』三月一〇日）

規約と常議員も伝えられている（いづれも『大阪朝日新聞』三月一〇日）。

「大阪自由苦楽府規約」

第一条 本会は政事上自由主義を執る者を以て組織す

第二条 本会は大阪自由苦楽府とす

第三条 会員たらんと欲する者は会員二名以上の紹介を以て其住所身分職業氏名を記して理事に通ずべし

第四条 入会の許否は理事協議の上之を決す 但し理事に於て必要と認むるときは之を常議員会に付することあるべし

第五条 会員事故ありて退会せんとするときは書簡を以て其旨理事に報ずべし

第六条 凡そ会員にして本会の趣意に背反し若くは本会の名譽を毀損し又は会員たるの義務を尽さざる者は常議員の議決を以て退会せしむることあるべし

第七条 本会は常議員三十名を置き規約の定むる所に依り会務を評決す

第八条 本会は理事三名を置き会務を整理せしむ

第九条 常議員は総会に於て投票を以て之を選挙し、理事常議員中より之を互選す

第十条 理事及び常議員の任期は各六箇月とし、常議員は総会に於て半数を、理事は常議員会に於て三名を各抽選を以て改選す

第十一条 理事は会務整頓の為に必用なる細則を設け常議員の議決を経て之を施行す

第十二条 毎年四月十月に総会を開き理事より報告する事務の顛末及び会計決算を勘査し其他緊要の事件を議決す 會員十名以上の請求若くは緊急の必要あるときは理事及び常議員の意見を以て臨時總會を開くことあるべし 總會及び臨時總會は會員總数の五分一出席するに非らざれば議事を開くことを得ず

第十三条 會員は毎月会費金十錢を理事に納む可し

〔常議員〕は、記事にもとづいて第3表をつくる。

第3表 大阪自由苦樂府・常議員一覽

地域	数	氏名
大阪市	10	伊藤徳三、横田虎彦、寺田寛、森作太郎、寺尾鉄之助、金丸鉄、日野国明、竹中鶴二郎、左近司六藏、石橋栄
島上郡	4	岡崎経充、森本玄良、三宅万寿雄、植場平
島下郡	1	馬場三右衛門
交野郡	1	井上誠一郎
若江郡	1	植田重太郎

次田郡	1	西村禎造
西成郡	2	林孝三、西島喜代三郎
東成住吉郡	2	多賀谷陳、錦谷亀太郎
日根郡	1	戸口亀太郎
南郡	2	井坂光輝、指吸千太郎
和泉大島郡	1	北田豊三郎
堺市	1	橋本佐平
川辺郡	1	吉弘直誠
能勢豊島郡	2	森秀次、小西莊太郎
理事		伊藤徳三、寺田寛、横田虎彦

(注) ——— は月曜会員。注(23)の史料による。

推挙委員は月曜会二：大阪苦楽府三と、大阪苦楽府が優勢だったが、理事では二：一となり、三〇名の常議員は細かくは不明だが、月曜会勢力が優勢と思われる（少なくとも一〇名）。摂河泉同志会の結成に見られるように、大阪苦楽府系も地域政治勢力の養成に努力していたが、月曜会系の勢力拡大はそれを上回っていたようである。

同時に、大阪苦楽府と月曜会の統一が、スムーズに進行していることが重要である。この統一は、一年前には考えられもしなかったほど、両者は対立していたのである。第一議会における壮士問題とは、地域利害を代表・代弁して代議士となっても、壮士の圧力により意見を変更し、利害を代弁しない可能性があることだった。壮士問題への恐怖が、統一をもたらしと言ってもよいだろう。

むすびにかえて

一八八七年の大阪には、三つの民権団体があった。分岐点は、名望家と壮士の位置づけ、受け入れ方である。壮士問題は、一八九〇年暮れからの第一議會でも問題になった。事態は、壮士を切り捨て、名望家を基盤として獲得する方向に流れていった。その象徴が、一八九一年三月七日の大阪自由苦楽府の結成である。そこに集まった旧月曜会と旧大阪苦楽府のメンバーは、立憲自由党とも距離を置く方針を採用した。立憲自由党を壮士団体が自由にしているという判断がそこにはあり、立憲自由党をそのように認識している限り、大阪自由苦楽府の中央への結集は不可能だった。

激しい対立を越えて成立した大阪自由苦楽府だったが、結成一週間後（三月一六日投票）の大阪四区補選（中江兆民の辞職による）では、理事の寺田寛を立てて、

村山龍平 六五八

見市乗保 五二九

福井英三郎 四〇四

寺田 寛 一七七

と惨敗を喫した（『大阪朝日新聞』三月一九日）。選挙区は、東成郡・西成郡・住吉郡にわたり、有権者一九三一人、投票者一八〇七人で、投票率九三・六%という高さでの敗北は、大阪における自由党勢力の前途に暗雲を投げかけるものだった。後藤孝夫氏は、『東雲新聞』を題材にしつつ、一路衰退過程にあると描いている。⁽²⁵⁾果たして、分離説をとった大阪自由苦楽府はどこへ行くのか。時間をかけてもう少し追究してみたい。

注

- (1) 拙稿『三大事件建白運動』と大阪民党」(梅溪昇教授退官記念論文集『日本近代の成立と展開』所収、思文閣出版、一九八四年四月)は、一部を書き改めて、拙著『日本近代都市史研究』(思文閣出版、一九九七年一月)に収めた。これは、一九八七年の三大事件建白運動だけに絞っている。
- (2) 北崎Aと前掲拙稿参照。
- (3) 北崎豊二「明治前期における大阪の民衆運動」(大阪歴史学会・地方史研究協議会編『地域概念の変遷』所収、雄山閣、一九七五年一〇月)。のち同氏『近代大阪と部落問題』(解放出版社、一九九七年四月)に収められた。
- (4) 一八八八年から一八九二年の壮士団体については、竹末勤「町村合併期の部落問題と『自由平権』主義」(『部落問題研究』第八三号、一九八五年四月)七八頁。
- (5) 同右。
- (6) 北崎A二六二頁参照。以下この章は同論文に依拠している。
- (7) 幹事八名のうち六名は、一月一六日の発起人会(六名中四〇名出席)で選ばれた。田村太兵衛・前川彦十郎・南区、佐野与兵衛・播本孝良・西区、福井精三・門田利助・東区。毎月五日の月例会の会場は、西俱樂部とされている。「○大阪協和会の会議」、『朝日新聞』一八八八年十一月一八日)
- (8) 『大阪府会史』第一巻、大阪府、一九〇〇年六月。
- (9) 同右。
- (10) 前掲後藤論文七一頁。
- (11) 北崎A二九一～二九六頁。
- (12) 北崎A二七一頁。
- (13) 同右。
- (14) 北崎A二六六頁。
- (15) 拙著二五二頁。
- (16) 月曜会と大阪苦楽府の対立状況については、後藤前掲論文と北崎Aを参照。
- (17) 鳥海靖「藩閥対民党」(内田健三・金原左門・古屋哲夫編『日本議事会史録』第一巻、第一法規出版、一九九一年二月)七〇～七三頁。
- (18) 第1表の注の文献二頁。
- (19) 注(17)の七三頁。
- (20) 第1表の注の文献三～四頁。
- (21) 前掲鳥海論文七五頁。
- (22) 北崎A二九一頁。
- (23) 「会員名簿／大阪月曜会／明治二十三年五月調査現員」(豊中市・奥野家文書)では、二七一名の会員となっている。『大阪朝日新聞』の記事の二ヶ月前であるが、これが実数ではないだろうか。
- (24) 以下、前掲鳥海論文による。
- (25) 前掲後藤論文。